

わたしの「国語」教室

——主題による統合の試み——

はじめに

「現代国語」・「古典」の歴史は、わたしの「教室」歴にほほみあう。その間のわたしの「国語」教室は、技能学習へのとらわれと価値学習への焦りとの間で、揺れつづけた。

今にして、「統合」を思う。とりざたされ、おしよせるもの重い教育の中で、国語教育も、また、極度の細分化の弊のただ中にある。ことは、この技術主義・形式主義への、ふみとどまってきた深い反省になければならない。

折しも、「新学習指導要領」は、ひとつには、人間尊重の精神を、ふたつには、学校教育の主体性を、骨子としているやに見えぬ。二つを見ずしての「反省」は、さらに、自発的な創意工夫に基づく、主体性をも求めている。

分化は、分散を呼ぶ。「精選」し「総合」され、統合された「教室」こそが、持続の中で深化を生む。「主題」による統合——これを機に、今こそ、ひと筋の体系を實踐してみたい。わたしの「教室」での、「創意工夫」である。

加藤 宏 文

一 「理解」と「表現」

「統合」を貫く。——まずは、「理解」と「表現」にでありたい。「理解」こそが、「表現」の意欲をかきたて、「表現」こそが、また、「理解」を点検し、深め、価値学習を高めていく。

「二領域」の設定と言う。「一単位程度」との明記もある。「総合」の中で、両者ははっきりと分化され、「言語の教育観」に基づいて、「表現」力が高められようとしている。「範例文」とも言う。「役立てる」でよいだろうか。

「役立てる」にことさらな「範例文」が、ことさらの一単位の中で、意欲に支えられた「表現」を生むか。否である。「表現別冊」は、避けねばならない。「精選」の下でこそ、「現代国語」での反省が生かせるときではないか。

ここに、ひとつの「教室」例を示し、むずかしさゆえに貫かねばならない、「統合」の世界の入り口を、確かめてみたい。一九七九年度、第二学年、「現代国語」、第二学期後半、授業時間一〇時間、一斉授業形態でのそれである。

○ 教材 「劇的な日本人」 山崎正和 (明治書院現代国語

二 新修版) (注1)

一、「古今和歌集」仮名序冒頭の二節での「表現」観を入り口にして、日本人の芸術観の特色をとらえる。(「二語作文」)

二、同じく、そこでの「伝達」のありようの特色をとらえる。(「二語作文」)

三、つぎの資料を読み味わい、「特色」を確かめる。(「二作文文」)

① 『毎月抄』 (五) ② 『正徹物語』 (四二・七七) ③ 『去来抄』 (二九・三八) ④ 『俳蘆小船』 (「情と詞」)

四、さらに、日本人の伝統的な人間観の問題にかかわって、「冒除の反覆」と「寡黙と先入観」の二点を、それぞれ説明する。(「二作文文」)

五、世阿弥を通して、自己拡張が、なぜ凄惨な戦いであるのかを、理解する。(「二作文文」)

六、同じく、役者と観客との融合と、その崩壊の、際限もない反覆の意味を、理解する。(「二作文文」)

七、「役者の表現が自然の花のように見える」の意味を説明する。(「二作文文」)

八、つぎの資料をも参考にして、「秘すれば花なり。」の意味を説明する。(「二作文文」)

○ 『風姿花伝』 (口語訳)

九、筆者の主張を、理解する。(「四作文文」)

十、つぎの資料をよく読み味わい、筆者の言う「日本人は「寡黙」」の真意をもとにして、比較する。(「二百字作文」)

○ 『日本人の周辺』 加藤秀俊

右の計画のうち、五以下は、どのように展開されたか。その過程を、わたしの発問を中心に示し、加えて、その目標への到達度を、九、十での「作文」例で確かめてみよう。

五、① 世阿弥の「芸術論」は、なぜ、「むしろ」「人間の『劇的』な宿命を語る」ていると言えるのか。一文で言い切ろう。

② 「あの不安な『表現』」の「あの」は、どういうことを受けているのか。該当する一文を抜き出そう。

③ つぎの二つを、それぞれ、一文で説明し切ろう。

(1) 役者の宿命 (2) 観客の嫉妬

④ 「凄惨な自己拡張の戦い」とは、(1) 誰と誰との、(2) どのような「自己」の戦いで、(3) なぜ、「凄惨」なのか。

六、① 表現者と鑑賞者とは、「一つに融合することができる」のは、(1) 誰が、(2) どうなったときなのか。

② 役者の生涯の、「際限もない反覆」とは、どんなことか。二文で説明しよう。

七、つぎの四つのことばをかならず使って、「役者の表現が自然の花のように見える」の意味を、二つの文で説明しよう。

(1) 融合 (2) 内容 (3) 存在 (4) 陶酔

八、① つぎのことばを、それぞれ、二文で説明しよう。

(1) 花を知る (2) 珍しさ (3) 内容 (4) 存在

② つぎの四つのことばをかならず使って、「秘すれば花なり。」の意味を、二文で説明しよう。

(1) 融合 (2) 内容 (3) 存在 (4) 陶酔

九、筆者の「主張」を説明するのに、

① かならず使うべきだと思ふ四つのことばを、まず確認しておこう。

② それらは、どの順序に使うべきか。

③ それぞれを、一文にしよう。

④ 四つの文は、どんな接続詞でつなぐと、説明のすじが通るか。

十、あなたの考えを、二百字にまとめよう。

○ 九の例(男子)

① 隠す 洗い上げる 寡黙 融合

② 寡黙 隠す 洗い上げる 融合

③ (1) 日本人は寡黙であると言われる。

(2) 表現意識を隠す努力をする。

(3) 寡黙さと他人志向性は、洗い上げねばならない。

(4) 表現者と受け取り手が一つに融合する。

④ つまり しかし そこで

○ 十の例(女子)

日本人は、世阿弥の「秘すれば花」の寡黙を、まちがった意味で表現するように、現在なってきたと、山崎氏は指摘した。全くそのとおりであってこの論にも、無言・や、沈黙・という語が使われているように、本当の寡黙さではない。また、このような沈黙が生じると、これは伝達をも、なくしてしまうことになる。これでは、他国から、日本は沈黙主義だといわれてもしかたがない。この論は日本人の歪曲した寡黙を証明している。

この二つの「表現」のありようは、とりもなおさず、この単元での「理解」のありようを示している。「統合」の世界は、ここに、つぎの入り口がどこであるべきかを示している。

二 「現代」と「古典」

「統合」を貫く。——これは、「現代」と「古典」とにでもありたい。「温故知新」・「伝統と創造」。わたしの「教室」は、めざしつつも、「主題」による統合を欠いてきていた。

「要領」の言う「精選」は、これまでの、分化による内容の「高度化」を、反省しているやに見える。たしかに、別々の世界としてその価値学習を高めようと、かえって、技能学習の形式に陥った。「高度」ではあった。

また、それは、分離による孤立化をも反省しているやに見える。たとえば、「明治」と「近代」、つまりは「現代」もが、「前近代」とあまりにも隔絶されすぎてきた。近世の軽視、作品の固定化も、そこから生まれてきた。

たとえば、主題「愛」。純愛・友情・恩愛・恋愛……。貫かれて普遍的であり、同時に、時間・空間において特殊性をも持つ。この「理解」を深め、その「表現」をと、「現代」の「教室」でのひとつの計画をうち立ててみた。

○ 単元 「愛」

中心教材 『伊豆の踊り子』 川端康成

〈授業計画〉 四単位 二四時間

一、範読。第一次感想文の記述。(1) 最も感動した一文を書き抜

く。(2) 感想記述。

二、相互批評。(1) 書き抜かれた一文の位置と意味とを確認する。

(2) 批評記述。(注2)

三、第一節。「旅情が」「身についた」時点を中心に、場面と心の変化とを整理する。

四、第二節。一語で小みだしをつけた上で、(1) 「ぼきんと折れる」(2) 「ほうと明るんだ」を、説明する。「一文作文」

五、第三節。「ことごと笑い続けた」に至るまでの心を、第一節より整理した上で、そのありようを、説明する。「二文作文」

六、第四節。(1) 栄吉さん、(2) 踊り子とが与えた影響をおさえた上で、(3) 「尋常な好意」を、説明する。「二文作文」

七、第五節。「わたし」が、この旅で克服したものを、説明する。「二百字作文」

八、第六節。(1) 婆さん、(2) 少年、それぞれへの行為を整理し、(3) 「甘い快さ」を、説明する。「二百字作文」

九、返ってきた「感想」と「批評」とを比べ、吟味し、(1) 問題点を一文で言い切り、(3) この小説の主題について、説明する。「二百字作文」(批評者宛の書簡体とする。)

十、つぎの資料をよく読み、新しく教えられたことを、一文で記述する。「一文作文」

○ 『前後作との関連』 羽島一英「国文学」一三一九

十一、① 「送元二使安西」王維 ② 「黄鶴樓送孟浩然之廣陵」李白

◎ 「盡」、「更」の文字に込められている作者の思いを、一文

で説明し切る。

十二、① 「贈衛八處士」杜甫 ② 「貧交行」杜甫

◎ 「故意」、「輕薄」について、同右。

十三、① 「九月九日憶山中兄弟」王維 ② 「憶弟二首」杜甫

◎ 「憶」の中心の一字をおさえて、同右。

十四、① 「憶幼子」杜甫 ② 「責子」陶淵明

◎ 「憶」、「責」について、同右。

十五、① 「子夜吳歌」李白 ② 「月夜」杜甫

◎ 句数と同数の文で、訳詩を創作する。

十六、つぎの資料をよく読み、「愛」について新しく考えたことを、二百字にまとめる。

○ 「月夜」(『杜甫ノート』) 吉川幸次郎

◎ 「なまめく」、「はしたなし」、「老いづく」、「みやび」を、各一文で説明する。

十八、伊勢物語 四十六段・六十二段

◎ 「うるはし」、「あさまし」、「思ひわぶ」、「心かしこし」、「こけるから」について、同右。

十九、梁塵秘抄 三四三、三四一、三三五、三六五、三三九。

◎ それぞれの歌に、適切な題をつける。

二十、謡曲 『隅田川』(『伊勢物語』参照。)

◎ レコード、スライドによる鑑賞と朗読。

二十一、謡曲 『隅田川』

◎ 「母の心」なる題で、二百字作文。

二十二、「永訣の朝」 宮沢賢治

◎ いちばん心うたれた部分について、同右。

二十三、「秋の祈り」 高村光太郎

◎ 二つの「祈り」を、各二百字で説明する。(注3)

二十四、この単元で、いちばん心うたれた「愛」の世界について、考えるところを四百字にまとめる。

以上、この単元は、『伊豆の踊り子』での、主人公の「孤児根性」解放への共鳴に始まる。すべての他人に親しむことのできない心が、「世界尋常の意味で」「いい人に見える」ことの「有難」さは、わたしたちに迫ってくる。この「甘い快さ」は、「愛」の普遍性への参与を意味する。寡黙な「教室」に灯をともし、「別離」による永遠の美を照らししてくれる。

さて、これを核にして、わたしたちは、中国をも含めた「古典」の世界にも、さまざまな「愛」の、深い相を求める。わたしたちは、そのひとつひとつに、その歴史・風土に生きた人たちが、愛に喜び、愛にかなしみ、そして、ことばの世界に、その永遠の美しさを昇華させてくれたことの恩恵に浴する。わたしたちは、人類の創造に参与するものである。

しかし、「主題」「愛」による統合を、細部にまで貫くためには、右の教材の体系、すなわち、友情・恋愛・恋愛などによる分類では、不十分である。清らかさ・かなしさ・はかなさ・厳しさ・豊かさなど、「美しさ」の核に迫るような「主題」意識を求めねばならない。ここに至って、そう考え始めている。

さらに、この体系は、後述の他の五つの単元の下に、「二領域一事項」の具体的な技能学習の要諦にも応えられる内容で、肉付けがなされねばならない。骨格を、ひとつの単元での授業計画に込めて、示すにとどまった。

三 「統合」と「主題」

分散を厭う。形式化を警戒する。その中で、見すえて貫くべきは、単元において具体的に一貫し、年間を通じて体系化され、学年を越えて発展すべき、「統合」の精神である。

わたしの「教室」は、現行カリキュラムの中で、「現代国語」においては、年間六教材(第三学年五教材)にしぼる中で、小じんまりと、その精神を貫こうとしてきた。第三学年「選択」では、やや大胆に試みてきた。(注4)

今や、「統合」は、「古典」をも包括しなければならない。これまでの、小じんまりとした「精神」を、大胆な試みの方にひきつけなければならぬ。そう考えつづけて、まとまりを見せ始めたのが、「主題」による統合である。

試みは、「現代国語」現行教科書において、すでにある。「学校図書」・「角川」が、それか。また、広島大学教育学部付属中・高等学校では、「自然」を第一に、すでに実践と展望とを示されている。(注5) 先学に学び、進めたい。

六つの主題を見すえて、展望してみる。

一、「自己との出会い」
青春にこそ、自己が発見され、それが根を張る。そこで初め

て、生は充実に向かう。

二、「自然をみつめる」

さきの出会いは、これによるところ大きい。その心は、人間性の基盤である。

三、「こころとことば」

出会ひ、みつめられた「こころ」は、「ことば」によって表現され、他人とかかわる。

四、「愛」

人は、ひとりでは生きていけない。「こころ」が「こころ」を求めえて、美を創る。

五、「生と死」

右の四つは、この中で、これを凝視した中で、ひとときわ真摯となる。

六、「文明と社会」

どの主題もが、このありようにかかわって深い。しかも、現代のそれは、危うい。

以下、「国語」を想定し、体系を示す。

一、「自己との出会ひ」

① 「母の架けた橋」 水上勉

② 「旅の空の下で」 森有正

③ 「夕焼け」 吉野弘

④ 「更級日記」(「物語」) 菅原孝標女

⑤ 「花鏡」(「知修道事」) 世阿弥

⑥ 「うひ山ふみ」(冒頭) 本居宣長

⑦ 「行行重行行」 「去者日以疎」(「詩経」)

⑧ 「唐詩選」 劉禹錫 岑參 張籍 他

⑨ 「唐詩選」 李白 杜甫 吳象之 他

二、「自然をみつめる」

① 現・近代俳句(含新聞俳壇入選作) (注6)

② 「小景異情」 室生犀星

③ 「近代科学と日本人の自然観」 渡辺正雄

④ 「枕草子」(三十七段) 清少納言

⑤ 「古今和歌集」(春・夏・秋・冬)

⑥ 「蕪村句集」 与謝蕪村

⑦ 「唐詩選」 王維 杜甫 他

⑧ 「唐詩選」 李白 他

⑨ 「唐詩選」 孟浩然 耿湣 他

三、「こころとことば」

① 「現代俳句における時間と空間」 森本哲郎

② 「日本語とは何か」 加藤周一

③ 「庶民の発見」 宮本常一

④ 「古今和歌集仮名序」 紀貫之

⑤ 「古今著聞集」(五十一・五二) 橘成季

⑥ 「芭蕉連句」 松尾芭蕉 他

⑦ 「論語」(「学而」他)

⑧ 「孟子」(「告子上」他)

⑨ 「老子」(四十八章他)

四、「愛」

- ① 「たけくらべ」 樋口一葉
 - ② 「伊豆の踊り子」 川端康成
 - ③ 「獄中日記」 滝沢修・文字
 - ④ 「伊勢物語」(初段・二十三段他)
 - ⑤ 「梁塵秘抄」(三四三他)
 - ⑥ 謡曲「隅田川」
 - ⑦ 「唐詩選」 王維
 - ⑧ 「唐詩選」 李白 杜甫
 - ⑨ 「陶淵明集」 陶潜
- 五、「生と死」
- ① 現・近代の短歌(含「昭和万葉集」巻六)
 - ② 「城の崎にて」 志賀直哉
 - ③ 「羅生門」 芥川龍之介
 - ④ 「古事記」(倭建命)
 - ⑤ 「徒然草」(七段他) 吉田兼好
 - ⑥ 「心中天の網島」 近松門左衛門
 - ⑦ 「唐詩選」 李白
 - ⑧ 「唐詩選」 杜甫
 - ⑨ 「唐詩選」 劉希夷
- 六、「文明と社会」
- ① 「ぼろぼろな駝鳥」 高村光太郎
 - ② 「ジョンナサン・スイフトの笑い」 白井吉見
 - ③ 「広瀬井手のこと」 都留重人

④ 「竹取物語」(いそのかみの中納言)

⑤ 「今昔物語集」(信濃守藤原陳忠)

⑥ 「建礼門院右京大夫集」(なみ風の)

⑦ 「詩経」(「硯鼠」)

⑧ 「楚辞」(「漁父辞」) 屈原

⑨ 「兵車行」 杜甫 「完炭翁」 白居易

○ 「表現」との統合について。

一、「自己との出会い」(「語作文」)

① 理解の中の中心語 ② 一語作文の試み ③ 一語作文と文章構成

二、「自然をみつめる」(「二作文」)

① 一語から一文へ ② 段落の中心文 ③ 一文作文と文章構成

三、「ところとことば」(「二作文」)

① 二文をつなぐ ② 段落をつなぐ ③ 二文作文と文章構成

四、「愛」(「四千字作文の試み」)

① 音読と読点 ② 相互批評 ③ 四千字定稿

五、「生と死」(「四千字作文の創造」)

① 題の設定 ② 段落構成 ③ 結びの一段 ④ 四千字定稿

六、「文明と社会」(「小論文の創造」)

① 題の設定 ② 段落構成 ③ 結びの一段 ④ 八百字小論文定稿

以上「主題」による「統合」を示した。

四「国語表現」・「現代文」・「古典」

分科、選択、深化発展。「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」を受けた「国語表現」・「現代文」・「古典」に共通したねらいは、そうである。

まず、「分科」。わたしの「教室」は、「国語Ⅰ」において、「理解」と「表現」との、「主題」による統合をめざしてきた。この精神を、「高め」、「深め(伸ばし)」、「親しむ」。これらの「分科」の中にも貫けないか。ひとつの計画がある。

つぎに、「選択」。「能力」などに応じた「適切な教育」を目指して、分科された三つは、「選択」の対象になっている。履習順序を含めて、実情に即してよいと。どのばあいにも、右の精神を貫けないか。計画を練ってみる。

さらに、「深化発展」。これを効果的にと考えての、右の二点であると言う。そうであろうか。「選択」は、「深化発展」のためのという「分科」を、分割・分散へと歪めはしないか。それでも、精神は貫けないか。こう考える。

一、「国語表現」と「現代文」との統合

前者について、「内容の取扱い」②は、つぎのように言う。

○(前略) 文章を書く機会を多くするとともに文章研究を十分に活用するようにする。

また、後者についても、同じく②は言う。

○ 調べたことを文章にまとめて報告したり、討議したりする機会を(後略)。

こうして、分科された「表現」は、「理解」を前提とするがため

に、「社会的適応」へと傾き、同じく「理解」は、「表現」を求めて、「知的生産力」に及ぶ。ここに、分散の弊が潜む。

わたしの「教室」は、かつて、つぎのように「深化発展」を目指した。

○「近代小説論」三年 選択 二単位(注4)

この試みは、つぎの三つの骨子からなる。

① 近代小説を「読み味わう」

② 近代小説論を「読み考える」

③ 近代小説論を「書く」

「理解」と「表現」との「主題」による統合を目指したものである。

ここで、わたしたちは、二葉亭四迷から太宰治に至る十四人の作家と、その作品、および、かかわる先学の論を読み味わうことを通して、昭和十年代に及ぶ日本の「近代」を主題として、「教室」を深めつづけた。中でも、具体的な技能学習のあり方を工夫することによって、「社会的適応」・「知的生産力」をも、体系化することができる。

さらに、この「高め」「深め」の過程において、心に持ちつづけた「主題」・「近代」は、読書計画をも支え、「親しむ」一年を實現した。この「主題」は、「国語Ⅰ・Ⅱ」の六つの主題の統合として生かされよう。

二、「古典」の主題による統合

さきの二分科に、「創意工夫」の余地が、比較的強く匂わされていたのに対して、ここでは、つぎの二つの「取扱い」が示されてい

る。

ひとつは、「まとまった」という点。ひとつまたは二つ以上の作品に焦点を合わせて、「理解」の「深化発展」を目指している。

ふたつには、「親しむ」ことを通して、「人生を豊かにする態度を育てる」ともする。分散を避け、じっくりと、という心からであるうか。

たとえば、「ひとつ」の作品として、『源氏物語』を「まとまった」ものとして扱うとするか。漢文とのかかわりをも持ちながら主題を貫くことは、どのように可能なか。

① 「源氏物語の端役たち」(注7)(かかわって、中国史伝中の端役像に注目する。)

② 「紫上物語」(かかわって、中国文学の中に、さまざまな女性像をさぐる。)

③ 「源氏物語の月」(他二、三の「素材」に限定し、中国文学の中にも求める。)

④ 「源氏物語のしれ者」(他「異端」像に限定し、中国文学の中にも求める。)

⑤ 「源氏物語の、なまめかし、」(他形容詞のいくつかに注目する。かかわって、中国文学の中に、いくつかの語を求める。)

など、さまざまな「統合」が可能であろう。

○ 「源氏物語の端役たち」 実践例

第三学年 選択 二単位 末摘花巻

大輔命婦
頭中将、侍従とともに、末摘花の虚像作りを担った命婦のあり

方から、光源氏が、実は笑いの対象になるこの巻の特質を読む。

④ 命婦登場の一節。(引用略。)

⑤ (その父兵部大輔についての「玉小櫛」の注。(引用略。))

問一、④で説明されている二筋の系図を、別々に示そう。

問二、この二つの系図が、実は一筋につながる可能性を、⑤は、

どんな理由をあげて説明しているか。二点指摘しよう。

問三、末摘花を紹介するにあたって、命婦は、琴をとりあげてい

る。(1) どうほめかしたのに対して、(2) 光源氏は、どう

理由づけ、(3) どう評価したのか。

問四、さらに、(1) 命婦のどんな言を、(2) 光源氏は、どう受け

とめてしまったか。

予想される四単位の「古典」においては、右に示した実践例を核にして、肉づけされたつぎのような四時間ひと組の計画が、できる。ここでは、「理解」と「表現」、および、「古文」と「漢文」の、主題による統合が考えられる。

一、一巻における「端役」活躍の場面を中心に、本文を読み味わう。「一文作文」

二、同巻の中心部分と、同巻(できれば当該「端役」)についての

の先学の論考を、読み味わう。「一文作文」(注8)

三、かかわって、中国史伝中活躍する「端役」登場の場面を中心

に、読み味わう。「二百字作文」

四、「端役」論を記述する。「四百字作文」

この四時間の中で、わたしたちは、たとえば光源氏よりもむしろ生々とした端役の生き方が、実は、物語の展開に大きくかかわって

いることを知りえた。そこには、「古典」を「現代」の「教室」に蘇らせる入り口がある。「表現」への意欲も、そこから生まれた。

五 目標に向かつて

○ この高等学校の国語教育の変質の端的な現われが、「古典」と「現代国語」の分離となつて現われて来ているのである。身近な所から言えば、一冊の国語教科書の中に、古典も現代文も含まれている時には、古典の方に多くの時間を割いて現代文はあまりやらないという傾向があったことも指摘されよう。(中略)だが要するに問題は、高等学校の国語科が、伝統的な古典教育の場であつたといふことであり、現代語教育が意識化されていなかつたといふことである。(注9)

かつて、「現代」は、このような経緯の下に、「古典」から分離された。その後、「詰め込み教育」が批判され、「全人的発達」・「人間としての調和」がうたわれて、今日の改訂を迎えた。ここの「総合」は、復古ではない。「現代」の「意識化」は、悩みをばらみながらも、定着してきている。むしろ、逆に、「古典」をそこへどうひきつけるかが、問われている。

○ さて、このように教えてくれる学習者の、「古典」とのかかわり合いの実感はどうでしょうか。一昨年の紛争以来、鋭く問いつめられてきながら、及ばぬ、懸案そのままです。

そのひとつは、「古典」は「ひとりごと」、いいと言われてみるから良く見えるだけで、フィードバックに合わない。歴史の流れから

浮いたもの、という実感です。これは、年々顕著にさえ見える、「古典」ナンセンス論の底流をなすところであろう。

さらに、その実感の由来を尋ねてみると、「文法やことばの端々ばかり」という、わたしの創り出している「古典」の現実があげられます。(中略)

加えて、教科書がこまざれであることへの不満。「ひとりごと」とは、つくり変えられた「古典」の正直な実感のようです。

そこで、学習者たちは、「もつと内面を。」「体ごと入れるようなことばや行動を。」などなど、ほんとうの「古典」をと叫びます。(後略)(注10)

○ つぎに、問題意識や批判的見解を、おざなりのままで捨てつづけないために、現行教科書の、上代より近世へ、ないしは、ジャンル別と分離する単元のあり方を、再検討してみることです。ちなみに、先の今昔物語集での「受領」におけるまわり道进行ののも、そのひとつでしょう。さらには、たとえば、恋とか旅とか、女の一生とか、または、鳥とか風とか雨とか涙とか、生活に即して組んでみれば、「古典」は、教室で蘇るのではないかと思えます。(注10)

そして、今、三たびの転換点に立って、やはり、貫こうと努めてきた「主題」による統合の「教室」を完成させたいと思う。右の「古典」におけるありようは、すなわち、「現代」と「古典」とのあべき関係を、再考させる。

先年、「近代小説論」(注4)の一年を終えるにあたって、学習

者は、こうふり返っていた。

○ 沢山の小説に、自分で考えながら、触れることができて、教科書にくらべると、この授業の方が、本当に現国をやった、と云う気がする。それは、また、作文によって、日頃あまり物事を考えない悪い状態を、多いに、反省できたと思う。作文もイヤではなくない、書くことによって、今まで15の作品を、自分なりに、こなしてきた気持ちになって、大麥、うれしく思います。高校に入ってからこんな授業は、今まで、なかったと思う。

○ 社会の情勢に目をつぶり、自分や自分のまわりのことだけ見つけて生きていけば、そんなに苦しんだりしなくても、よかったものを、あまりにも多くの作家が、文学のために、社会のために、我が身を傷つけている。文学者たる使命感ゆえだろうか。文学の道とは、あまりに厳しすぎる。……これが、私の一年間を通じて、痛切に感じられた第一のことである。

こうふり返ってみて、わたしの目標は、いっそう具体的に見え、同時に、より具体的な困難が、目の前にたちはだかる。一歩進みたい。

おわりに

みんな走っている。「国語」教室も、走っている。走りながら、わたしたちは、とみに寡黙になってきた。何とかしなければならぬ。

① 能力主義から人間性の重視へ

② 精選とゆとり

③ 基礎的なことからの重視

④ 「表現」力の養成

新しい「指導要領」は、これらを目指し、「教室」の主體的判断・自発的創意工夫を求めている。「教室」が、発言しなければならぬ。

「能力主義」は、どう反省されたのか。「精選」は、「ゆとり」を生みえるか。「基礎」は、「寡黙」を、「人間性」の名において救いえるか。

わたしたちは、日々の深刻な困惑の中にあって、これらの問いに、「教室」の中からこそ、今や、具体的な答えを出さなければならぬ。「主題による統合の試み」は、おもに、「わたしの『現代国語』教室」の実践の中から展望したものである。実践の中で問いをつづけたい。

注1 評論文教材での授業計画については、拙稿「わたしの授業計画」(筑摩書房刊「現代国語」3学習指導の研究)を参照されたい。

2 小説教材での相互批評の実際については、拙稿「わたしの『現代国語』教室(二)(『こころ』を読む——)」「国語教育研究(二四号)」を参照されたい。

3 詩教材での実践例については、拙稿「わたしの『現代国語』教室(一)——伊東静雄への入り口——(同二三号)」を参照されたい。

- 4 「「書く」意欲を——『現代国語』学習体系における作文教育の目標——（抄）」（「教育委員会制度発足三十周年記念研究論文集」大阪府教育委員会）
- 5 昭和五十四年度広島大学付属中・高等学校中等教育研究会、国語部会、「『国語I』の授業の試み1」など。
- 6 俳句教材での実践例については、「わたしの『現代国語』教室（三）——近代俳句への『脇』——」（一九七八・八・一）
- 二、広島大学教育教育学部国語教育学会で口頭発表。）で示した。
- 7 拙稿「源氏物語の端役たち（二）——「こま」の相人——」（大阪府立豊中高等学校研究紀要「豊陵」六号）他
- 8 たとえば、「末摘花から近江君へ」野村精一（「日本文学」昭和三十三年二月。）
- 9 「高等学校の国語科古典と現代国語」高橋和夫（「実践国語」昭和三十七年三月）
- 10 「ある教室から」（昭和四十六年度広島大学国語国文学会秋季研究集会・国語教育研究協議会で口頭発表。）

（一九八〇・一・二九記）

（大阪府立豊中高等学校教諭）